

# リビア王朝の分権的支配と婚姻政策

藤井 信之\*

Nobuyuki FUJII\*

## 1 はじめに

古代エジプトでは、ファラオが強力な中央集権体制に支えられ巨大な権力を揮って全土を支配していた、と考える方が多いのではないだろうか。確かにそうした時代もあるのだが、ここで取り上げるリビア王朝時代では、まったく異なった分権的な支配体制が敷かれていた。リビア王朝時代のエジプトは、各地に有力者が群雄割拠しているかのように見えることから、かつては王による支配体制が機能しなくなった衰退期だと考えられ、それゆえ第3中間期（前1076年頃—前723年頃）<sup>1</sup>という用語で時代区分された。しかし今日ではこうした見方が再考され、意図的な分権的支配体制であったと考えられるようになってきている。ここではその分権的支配体制を概観する。

## 2 リビア王朝史の枠組み

リビア王朝時代（前943年頃—前723年頃）は、先にも触れたように第3中間期に時代区分され、一般に第22王朝から第24王朝までの期間を指す。まず初めにリビア系諸王朝と諸王を整理して提示しようと思うが、未だ意見の一致を見ない点が多々あることから、ここでの整理も暫定的なものだということを付言しておきたい<sup>2</sup>。

### （a）第22王朝

史料に確認される以下の10人の王が第22王朝の王であったと考えられている。ここでは諸王を峻別するのに必要な即位名と誕生名、およびエピセツのみを示し、問題とならないエピセツはすべて省略して提示する。

---

\* 関西大学国際文化財文化研究センター

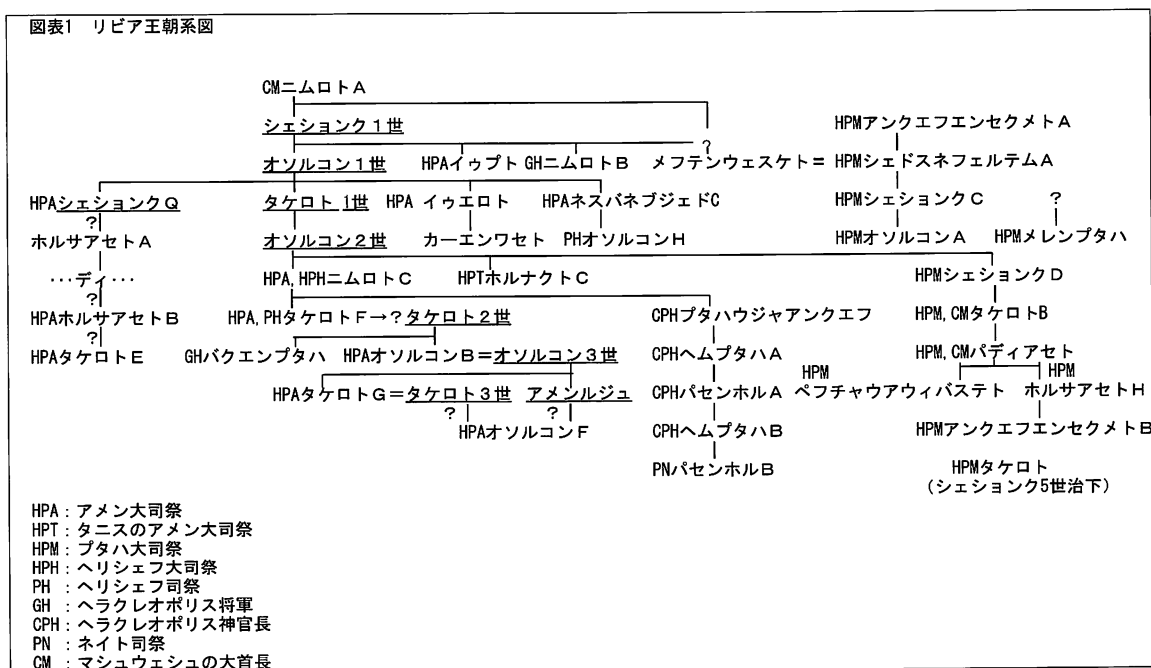
(Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University, Japan)

1 この時代の実年代については未だ異論が多い。本稿では Hornung, E. *et al.* (eds.), 2006 に従った。

2 詳しくは、藤井信之 2016 を参照。

- シェションク 1 世 (ヘジュケペルラー / シェションク)
- オソルコン 1 世 (セケムケペルラー / オソルコン)
- [シェションク 2 世 (a) (ヘカケペルラー / シェションク)]
- タケロト 1 世 (ヘジュケペルラー / タケロト)
- [シェションク 2 世 (b) (トウトケペルラー / シェションク)]
- オソルコン 2 世 (ウセルマアトラー / オソルコン・サバステ)
- シェションク 3 世
- (ウセルマアトラー・セテプエンアメン [セテプエンラー] / シェションク・サバステ)
- シェションク 4 世 (ヘジュケペルラー / シェションク・サバステ・ネチエルヘカイウヌウ)
- パミ (ウセルマアトラー / パミ)
- シェションク 5 世 (アアケペルラー / シェションク)

上記のうち、シェションク 2 世 (a) とシェションク 2 世 (b) の在位時期については諸説があり意見の一致を見ていない。またこの両王が単独で統治した時期があったのか、あるいは共治王でしかなかったのか、ということについても明確なことは分からない状況である。また史料からマアケペルラー / シェションクという王の存在も知られているが<sup>3</sup>、マアケペルラーを即位名とする王が実在したのか、あるいはマアケペルラーはヘジュケペルラーの誤記に過ぎず、マアケペルラー / シェションク王は実在しないのか、ということも確かなことは分からないままである。ここでは実在が確かでないということで省略した<sup>4</sup>。



3 この王は、議論の上では他のシェションク王と区別するためシェションク 2 世 (c) とされる。

4 シェションク 2 世 (a)(b)(c) については、藤井 2016、24-25 頁を参照。

第22王朝の出自は、「パセンホル・ステラ」と呼ばれるステラの碑文から知られる<sup>5</sup>。「パセンホル・ステラ」は、シェションク5世の第37年に亡くなった聖牛アピスの埋葬に伴って捧げられたステラで、第22王朝初代のシェションク1世の6世代前の先祖までを記録している。それによると第22王朝はリビア人ブユワワの子孫であった。またシェションク1世の祖父シェションクAと父ニムロトAは、「マシュウエシュの大首長（大君）」という称号を持っていたことが知られる。またカルナクのコンス神殿屋上の一碑文<sup>6</sup>から、第21王朝のオソルコン王（大オソルコン）がシェションク1世の伯父にあたることが知られている<sup>7</sup>。

これらの史料から、第22王朝はリビア人の子孫が樹立した王朝であり、第21王朝の後半から極めて有力な勢力として台頭していたことが分かる。王朝の出身地はブバスティスとされるが、シェションク1世に関わる確かな史料は、どういうわけかブバスティスから出ていない<sup>8</sup>。

第22王朝前半の王のうち、シェションク1世、オソルコン1世、タケロト1世、オソルコン2世は、それぞれ父子直系の継承であることが「パセンホル・ステラ」の碑文から知られるが、シェションク2世（a）とシェションク2世（b）の出自は不明なままである。また第22王朝後半の諸王は、シェションク5世がパミの子であったことが知られる以外、今のところ系譜関係が不明なままである（図表1）。

#### (b) 上エジプトの第23王朝

第22王朝中期のオソルコン2世の治世になると上エジプトにも王が存在していたことが知られる。史料から以下の諸王が知られるが、これら上エジプト諸王をどのように呼ぶかについては意見が分かれる。ここでは「上エジプトの第23王朝」と呼んでおく<sup>9</sup>。

ホルサアセトA（ヘジュケペルラー／ホルサアセト）

タケロト2世（ヘジュケペルラー／タケロト・サアセト）

イウプト1世（即位名不詳／イウプト・サアセト）

パディバステト1世（ウセルマアトラー／パディバステト・サアセト [サバステト]）

シェションク6世（ウセルマアトラー・メリアメン／シェションク）

オソルコン3世（ウセルマアトラー／オソルコン・サアセト）

タケロト3世（ウセルマアトラー／タケロト・サアセト）

5 Malinine, *et al.*, 1968, 30-31, Pl. X(No.31).

6 19世紀の調査で記録されたが、その後、破壊され現存していない。

7 Yoyotte, 1977 を参照。

8 Troy, 2009 を参照。

9 以前は「テーベの第23王朝」とする研究者が多かった。また、このグループの王を「上エジプトの第22王朝」とする研究者もいる。この点は、藤井信之 2016、43-44 頁を参照。

ルジュアメン (ウセルマアトラー／ルジュアメン)

[シェションク 6 世 (a) / 7 世? (ヘジュケペルラー／シェションク・サアセト)]

イニィ (メンケペルラー／イニィ)

上記の諸王のうち、イタリックで示したパディバステト 1 世とシェションク 6 世はタケロト 2 世とその王子でアメン大司祭であったオソルコン B (後のオソルコン 3 世と同一人物と考えられる) と対立していた並立王である。シェションク 7 世が実在したかどうかは未だ定かでない。これらの王はテーベでその名が確認される王たちであるが、リビア朝末期にはテーベ以外の上エジプトにも王が存在したことが知られている。それらを以下に挙げておく。

ヘルモポリスの王

ニムロト (即位名不詳／ニムロト)

トトエムハト (ネフェルケペルラー・カアカア (ウ) / ジェフティエムハト)

ヘラクレオポリスの王

ペフチャウアウィバステト (ネフェルカラー／ペフチャウアウィバステト)

ペフチャウアウィバステトとニムロトは、リビア朝末期にエジプトに侵攻したクシュ王ピ (アंक) イの戦勝碑に現れる王である。他にクシュ時代初期の恐らくアシウトにパディネムティなる王が存在したことが知られている。

(c) 下エジプトの第 23 王朝

リビア朝末期からクシュ王朝時代にかけて、下エジプトにも第 22 王朝に属さない王が存在したことが知られている。ここでは「下エジプトの第 23 王朝」と呼んでおく。

レオントポリスの王

イウプト 2 世 (ウセルマアトラー／イウプト・サバステト)

この王もクシュ王ピ (アंक) イの戦勝碑に現れる王である。他にペンアメン・[/////] メリタウイという名の王の存在が知られているが、この王がレオントポリスの王であったかどうかは定かでない。

タニスの王

オソルコン 4 世 (ウセルマアトラー／オソルコン)

ゲメネフコンスバク (シェプセスカラー・イルエンラー／ゲメネフコンスバク)

パディバステト 2 世 (セヘテプイブ (エン) ラー／パディバステト)

セケムカラー（セケムカラー／誕生名不明）

ウアフイブラー（ネフェルカラー／ウアフイブラー）

これらの王は、今では「タニスの第 23 王朝」あるいは「下エジプトの第 23 王朝」と呼ばれ、このグループの王たちがマネトンの伝える第 23 王朝にあたる则认为る研究者が増えている<sup>10</sup>。しかしオソルコン 4 世とパディバステト 2 世<sup>11</sup>以外の諸王は、主にタニスで出土した断片的なレリーフ以外に史料がなく不明な点が多い<sup>12</sup>。それ故、これら諸王の即位順も全く分かっていない<sup>13</sup>。これらの王たちは、クシュ王朝のもとでタニス及びその周辺の統治を委ねられていたと考えられている。

#### (d) 第 24 王朝

サイスに興った王朝で、マネトンはボッコリス王一人から成る王朝と伝えている。このボッコリスは、エジプト語史料ではバクエンレネフという名で知られる王と同一人物と考えられる。このバクエンレネフ王の前にサイスを拠点に勢力を伸張させていたのが、クシュ王ピ（アンク）イと戦った「西の大首長（大君）」を号するテフナクトであった。現在、アテネに所在する奉献碑<sup>14</sup>に現れるテフナクト王がこの西の大首長テフナクトと同一人物であったなら、マネトンには伝えられていないが、テフナクトも第 24 王朝の王ということができる。しかしアテネの奉献碑に現れるテフナクト王は、サイス朝第 26 王朝の遠祖で別人と考える説もあり、今のところ西の大首長テフナクトが即位したか否かは定かでない<sup>15</sup>。

#### (e) リビア王朝史の流れ

リビア王朝はシェションク 1 世からオソルコン 2 世の治世まで、およそ 100 年の間、エジプト全土を統一支配していた。しかしオソルコン 2 世の治下より上エジプトでは並立する王（ホルサアセット A、タケロト 2 世）が現れ、同王の死後、リビア王朝は分裂した。その後上エ

10 Leahy, A. 1990, 186-190; Beckerath, 2003, 34-36; Jansen-Winkel, 2006, 246-247; Aston, 2009a, 22-24, 26-27; Aston, 2009b, 34-35; Payraudeau, 2014, 100-102.

11 ここでは、パディバステト・サアセット王とパディバステト・サバステト王を取り敢えず同一人物と考える説に従って諸王を整理しているが、同一人物ではなく異なる二人の王と考える説に従えば、このセヘテプイブ（エン）ラー／パディバステト王はパディバステト 3 世ということになる。この「パディバステト問題」については、藤井 2016、32-35 頁を参照。

12 タニスの聖池で発見されたレリーフ。Cf. Montet, 1966, 63-81. これらタニスの小王たちについては、Moje, 2014, 21-24, 341-362; Jansen-Winkel, K. 2009, 252-257 を参照。

13 ここでは、便宜的に Moje, 2014 の挙げる順に従って列挙した。

14 Jansen-Winkel, 2007, 372-373, No.2.

15 Cf. Yoyotte, 2012, 131.

ジプトは長期の内戦に見舞われたが（「オソルコン王子の年代記」<sup>16</sup>、この混乱をオソルコン3世が終息させた。しかしオソルコン3世の子タケロト3世とその兄弟ルジュアメンの治世の後、上エジプトはヘルモポリス、ヘラクレオポリスそして恐らくテーベ<sup>17</sup>に王が並立する状態になったと考えられる。

一方、下エジプトではシェションク3世の治世以降になると下エジプトの主要都市にリビア系諸侯が蟠踞するようになる。そしてリビア朝末期には、少なくともレオントポリスに第22王朝とは異なるもう一人の王が存在するようになった。クシュ王ピ(アンク)ィが、エジプトに侵攻したのは、まさにこのような状況にあった時であった。

### 3 研究方法

リビア王朝は先に見た通り、オソルコン2世治下までの前半はエジプト全土を統べていたが、王朝後半になると分裂し各地に王が存在するようになった。それ故ここでは、エジプト全土を統一支配していた王朝前半を中心にその支配の特徴を見ていくことにしたい<sup>18</sup>。

エジプト学が有する史料の多くは、葬送葬祭に関連する史料である。墓から出土する副葬品や神殿から出土する葬祭彫像には、死者の生前の地位や役職、それに出自が記されている場合が多い。そこでこれらの史料から、当時の支配階層に属する人々の所持称号や出自を調査して、行政や社会の中での人的関係を分析することで、当時の支配のあり方を明らかにしていくことになる。こうした研究手法をプロソポグラフィ研究と呼んでいる。ここでは、リビア王朝の王族や地方に蟠踞した将軍や有力神官らが残した碑文史料から、彼らの所持称号や出自に関わる情報を抽出・集成して分析することで、リビア王朝の支配体制の特徴を明らかにしていく。

この研究手法を用いる場合、留意しておかなければならないことがある。それは史料の偏在である。史料は遺跡がおかれていた状況やこれまでの発掘のあり方から、上エジプトのテーベに偏在しており、その他の地域、特に下エジプトは史料が少ない。それ故、多くの史料が残存するテーベ地方は、他の地方より客観的な当時の“傾向”を抽出することができるが、史料が少ないその他の地方の分析結果は、その取扱いに慎重な判断が必要ということになる。特にリビア王朝時代についていえば、テーベは「カルナク神殿の隠し場所」出土の数多くの葬祭彫像から、当時の神官団を再構成できるが<sup>19</sup>、他の地方は史料が非常に限られていることから、それら地方の神官団については不明な点が多いままである。それ故、テーベの神官団がこれまで

---

16 Caminos, 1958.

17 イニィ王がどこに居たのか確かなことは分からないが、リビア朝末からクシュ期初期にかけて、テーベで確認される最後の王がイニィである。

18 王朝後半の特に下エジプトのリビア系諸侯については機会を改めて取り上げることにしたいと考える。

19 代表的な研究に Bierbrier, 1975; Vittmann, 1978; Payraudeau, 2014 などがある。

研究の中心になってきた。次にこれまでの主な研究を紹介しておく。

#### 4 史料集成と主な研究

長らくリビア王朝時代については史料集成がなされていなかったため、この時代の研究者は発掘報告や専門誌に公刊された史料を集めて研究しなければならなかった。しかし2007年にヤンゼン-ヴィンケルンによってリビア王朝時代の史料が集成され出版された。これが Jansen-Winkel, K. *Inscripciones der Spätzeit, Teil II: Die 22.-24. Dynastie*, Wiesbaden 2007 である。

長らく第3中間期研究の基本文献となってきたのは、Kitchen, K. A. *The Third Intermediate Period in Egypt* (1st ed. 1972, 2nd ed. with supplement 1986, Reprinted with a new preface 1996), Warminster 1996 である。この研究を出発点として、その後多くの論文が専門誌に発表されてきた。キッチンの研究成果のうち、オソルコン2世治下以降の並立諸王を下エジプトのレオントポリスの王朝とする説は今では支持されておらず、むしろこれら並立諸王は上エジプトの王達であったと考える研究者が多い。この研究史上の転換点となった研究が、Aston, D. A. "Takeloth II – A King of the 'Theban Twenty-third Dynasty' ?" *JEA* 75, 1989, 139-153 と Leahy, A. (ed.) *Libya and Egypt c1300-750 BC*, London 1990 である。2009年には、近年のリビア王朝時代研究の成果を収めた論集、Broekman, G.P.F. et al. (eds.) *The Libyan period in Egypt*, Leuven 2009 が公刊された。これによって最近の研究動向を知ることができる。

次に地域別の研究を紹介する。史料が集中するテーベの行政と社会については、最近ペロドーの大著、Payraudeau, F. *Administration, société et pouvoir à Thèbes sous la XXIIIe dynastie bubastite*, Le Caire 2014 が出版された。また第3中間期中部エジプトの史料を集成して研究した Meffre, R. *D'Héracléopolis à Hermopolis*, Paris 2015 が出版され、この地域の研究が飛躍的に進展した。下エジプトの有力者についての基本文献は、長らく Yoyotte, J. "Les principautés du delta au temps de l'anarchie libyenne" *Mélanges Maspero*, I-4, 1961, 121-181 と Gomaà, F. *Die libyschen Fürstentümer des Deltas*, Wiesbaden 1974 であった。このうちヨヨットの文献は、ペルドゥのコメントを付して2012年に再刊された (Yoyotte, J. *Les principautés du Delta au temps de l'anarchie libyenne*, réédition revue et augmentée, Le Caire 2012)。そして2014年になって、前1千年紀の地方君主達の史料を集成して研究した Moje, J. *Herrschaftsräume und Herrschaftswissen ägyptischer Lokalregenten*, Berlin 2014 が公刊された。

リビア王朝時代は、軍事称号所持者が重要な位置を占めた時代であったが、前1千年紀の軍関係者のプロソポグラフィに関する基本文献となっているのが、Chevereau, P.-M. *Prosopographie des cadres militaires égyptiens de la Basse Époque*, Antony 1985 である。

上記の諸研究から明らかのように、リビア王朝時代はエジプト各地に有力者が蟠踞していることから、長らく諸勢力によって国土が分断された衰退期だとされてきた。しかし今日では、

これは中央集権に失敗した結果ではなく、意図的な分権的支配がなされた結果であると理解されるようになってきている。このようにパラダイムの転換を促すことになった研究が Leahy, A. "The Libyan Period in Egypt, An Essay in Interpretation" *Libyan Studies* 16, 1985, 51-65 である。

次にリビア王朝時代の考古学的研究を二つ紹介しておこう。一つは第3中間期の副葬品を総合的に研究した Aston, D. A. *Burial Assemblages of Dynasty 21-25. Chronology - Typology - Developments*, Wien 2009 である。もう一つは第3中間期の葬祭彫像を型式学的に研究した Brandl, H. *Untersuchungen zur steinernen Privatplastik der Dritten Zwischenzeit. Typologie · Ikonographie · Stilistik*, Berlin 2008 である。これら二研究は、今後のリビア王朝時代史研究において重要な役割を果たしていくことになるであろう。

最後に手前味噌で恐縮だが、リビア王朝時代に関する邦文研究として、幾つか筆者の研究を紹介しておく。藤井信之「リビア系諸王朝と諸王をめぐる問題について」『古代エジプト研究』1 (2016)、23-47 頁では、リビア王朝時代史の枠組みについて最近の研究動向を踏まえて整理・検討した。藤井信之「エジプト第23王朝の所在地問題について」『関学西洋史論集』20 (1995)、13-28 頁と藤井信之「オソルコン3世後の上エジプト」『オリエント』38-1 (1995)、113-129 頁では、上エジプトの並立諸王をめぐる問題について整理・検討した。また藤井信之「「テーベの第23王朝」成立の背景」屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』同成社(2003)、285-297 頁では、上エジプトに並立王が出現した背景について考察した。藤井信之「リビア王朝の支配とアメン神官団」『西洋史学』192 (1998)、23-47 頁では、リビア王朝のテーベ支配をめぐる問題について考察した。テーベ以外の地域におけるリビア王朝の支配のあり方については、藤井信之「リビア王朝の地方支配と神殿」『古代史年報』6 (2008)、1-20 頁で考察した。ただしメンフィスとリビア朝後半における下エジプトのリビア系諸侯については考察の対象としておらず、これらはいずれ機会を改めて論じたいと考えている。最後に、藤井信之「ソロモンへ嫁した「ファラオの娘」をめぐる問題について」『神戸国際大学紀要』83 (2012)、25-34 頁では、前1千年紀のエジプトを長い衰退期とする衰退史観の問題を踏まえてリビア王朝の婚姻政策を論じた。

次章ではリビア王朝の支配体制の特徴を見ていくことになるが、ここでは近年の諸研究を踏まえながら、主に藤井信之「リビア王朝の支配とアメン神官団」『西洋史学』192 (1998)、23-47 頁と藤井信之「リビア王朝の地方支配と神殿」『古代史年報』6 (2008)、1-20 頁の二論文に基づいて検討を進めていくことにしたい。

## 5 リビア王朝の支配体制：軍政官による分権的支配

### (a) リビア王朝成立前夜のエジプト

リビア王朝の支配体制を考えるためには、リビア王朝の支配の前提となったリビア朝成立期のエジプトの状況を確認しておく必要がある。そこでリビア王朝成立前夜のエジプト史をここで簡単に振り返っておく。



新王国時代の後半、いわゆるラメセス王朝時代はラメセス2世の治世を繁栄の頂点として、その後徐々に衰退していった。この頃、エジプトは西方からの民族移動の波に直面し、攻勢から守勢に転じていった。エジプトに押し寄せてきたのは、リビア人や「海の民」と総称される人々であった。彼らは女子供を連れて来ていたことから、その目的はエジプト征服ではなく移住であったと考えられる。つまり侵略者というより難民と言ってよい存在であった。メルエンプタハやラメセス3世は彼らの撃退を記録しているが、間断なく押し寄せる難民に対して軍事的に対処するには限界もあり、新王国未までに特にリビア人のエジプト移住が進んでいったと考えられる<sup>20</sup>。

このリビア人のエジプト移住を助長したのが、エジプト国内の混乱であった。「海の民」を撃退したラメセス3世治下では、宰相の罷免事件<sup>21</sup>やストライキ<sup>22</sup>が起り、そして恐らく王は後宮で暗殺された<sup>23</sup>。第20王朝時代の史料は、その他にも神官の汚職や神殿襲撃事件そして王墓の盗掘など、神官や官僚らの規律が乱れて不正が横行し支配体制が弛緩していく様を今に伝えている<sup>24</sup>。やがてラメセス11世治下になると治安がますます悪化して、テーベでは時のアメン大司祭アメンヘテプが監禁される事件が起り、社会の混乱は頂点に達した。この時、アメン大司祭アメンヘテプは王に救援を求めるよりほか手立てがなかった。またこの頃、ヌビア総督であったパネフシが反乱を起こし、ラメセス11世が居たエジプト北部へと軍を進めていった。ラメセス11世は、この反乱軍を迎え撃つために将軍ピアンクを差し向けた。ピアンクはパネフシをヌビアへ追放することに成功し、テーベに腰を落ち着けるとアメン大司祭を兼任してテーベから上エジプトを統治しはじめた<sup>25</sup>。これがリビア王朝時代に先立つ第21王朝期にアル＝ヒバ以南の上エジプトを事実上支配した「アメン神権国家」の起源となった。

第21王朝期の「アメン神権国家」では、アメン大司祭を兼ねる（大）将軍が事実上の支配者として君臨した。この第21王朝期のアメン大司祭は新王国時代のアメン大司祭の延長線上に位置づけられるような存在ではなく、全く異なった性格を有するという点に注意が必要である。新王国時代のアメン大司祭は、軍事力を持たなかった。それ故、アメン大司祭アメンヘテプは監禁されたとき、抵抗する術もなく王に救援を求めるよりほかなかったのである。第21王朝期のアメン大司祭は、本来が（大）将軍であり、その（大）将軍が支配のためにアメン大司祭を兼ねているのである。つまり第21王朝期のアメン大司祭は「神官の衣装を纏った軍人」であって、その政権は神官の政権ではなく軍事政権であったということになる。この政権は、ピアンクの子孫によって代々継承され、第21王朝期の間、アル＝ヒバ以南の上エジプ

20 Kitchen, 1990.

21 Grandet, 2005, 194-195.

22 Vernus, 2003, 50-69.

23 Vernus, 2003, 108-120; Redford, 2002.

24 Vernus, 2003 を参照。

25 ラメセス11世時代については、Barwic, 2011 を参照。

トを事実上支配していた。そしておよそ 130 年後、リビア王朝が成立すると、「アメン神権国家」はリビア王朝の支配に組み込まれることになったのである。

#### (b) リビア王朝のテーベ支配

リビア朝第 22 王朝の初代シェションク 1 世はテーベの「アメン神権国家」を体制内化するべく、王子イウトを大將軍兼アメン大司祭に任命して上エジプトに派遣した。また他の王子ニムロト B をヘラクレオポリス將軍に任命し中部エジプトを治めさせた。その後、ヘラクレオポリス將軍もヘリシェフ (大) 司祭を兼ねるようになった。こうして (大) 司祭を兼ねる (大) 將軍が軍政官として地方を治める分権的な支配体制が整えられていった。

新王国時代の歴代諸王がエジプト各地に神殿を建造したことから、それらを預かる神官団が整備され各地の神殿機構が発達していったと考えられる。しかし新王国が終焉するとエジプト全土を統べる中央集権的な支配体制が崩壊し、各地に神殿機構が残されることになった。リビア王朝はエジプト支配のために、この神殿機構を利用することになったと考えられる。それゆえ各地に軍政官として派遣される (大) 將軍は、多くの場合、それぞれの地方の神殿の (大) 司祭を兼ねることになったのである。

#### (c) リビア王朝時代のアメン大司祭

リビア王朝時代のアメン大司祭を図表 2 に整理して示した<sup>26</sup>。最後に示したシェションクやアネクタケロトは年代不詳でリビア王朝時代のアメン大司祭かどうか確かなことは分からない。出自が不明のアメン大司祭もいるが、およそ王子が任命されていることをこの図表から見て取ることができる。そしてアメン大司祭の世襲が避けられていることも見て取ることができる。王子ではなくアメン大司祭の子がアメン大司祭になった例外は、史料から確認できるところではニムロト C の子タケロト F だけである。また史料が乏しいタケロト E とタケロト G では確認が取れないが、ほぼ歴代のアメン大司祭が大將軍 (*imy-r mšꜥ wr*) や司令官 (*ḥꜣwtj*) といった軍事称号を持っている。テーベに派遣された王子はアメン大司祭と大將軍を兼ねるのが基本であったことが分かる。このようにリビア朝の前半では、王子が大將軍としてテーベに派遣されアメン大司祭を兼任して軍政官として「アメン神権国家」の領域を支配していた。

もう少し軍事称号に注目してみると、リビア朝前半のイウト、イウエロト、ネスバネブジェド C は「上エジプトの司令官」というように上エジプトに権限を限る軍事称号が史料に列挙されている場合がある。しかしリビア朝中期以降には、そのような称号は見られなくなる。これ

26 図表 2 は、藤井 2003、286 頁の表を基に、Payraudeau, 2014 および Meffre, 2015 の研究成果を加味し一部修正して作成した。Payraudeau, 2014 では、ニムロト C の子タケロト F をタケロト F / G とするが、即位前の人物はアルファベット記号で区別する慣習があることから、本稿ではこれまで通りオソルコン 3 世の子をタケロト G とした。(a) ホルサアケト B と (b) タケロト E は、(7) オソルコン B と対立していたアメン大司祭である。

はアメン大司祭権の変化を示している可能性が高い。またオソルコン2世治下のニムロトCはヘラクレオポリスの主神ヘリシェフの大司祭やヘラクレオポリス将軍といったヘラクレオポリスに関係する称号を持つ。その子タケロトFもヘリシェフ司祭の称号を持っていた<sup>27</sup>。この両者の時期にはアメン大司祭が「アメン神権国家」の領域を超え、ファイユーム地方まで管轄していたことが分かる。現在、このタケロトFこそ後のタケロト2世だと考える研究者が多い。リビア朝前期を通じてアメン大司祭権が北へと伸張し、さらに父子で世襲されたことが、タケロト2世という上エジプトの並立王を誕生させたと考えられる<sup>28</sup>。リビア王朝の軍政官による分権的支配は、軍政官の世襲が避けられ、テーベとヘラクレオポリスが別人によって管掌されている場合に機能していたということになるだろう。そこで次にヘラクレオポリスの状況を見よう。

図表2 リビア王朝時代のアメン大司祭

アメン大司祭名	軍事称号	上エジプト長官	ヘラクレオポリス 関係の称号	出自
(1)イウプト	(*)	*		シェションク1世の王子
(2)シェションクQ	*			オソルコン1世の王子
(3)イウエロト	(*)			オソルコン1世の王子
(4)ネスバネブジェドC	(*)			オソルコン1世の王子
(?)ホルサアセットA	アメン大司祭であったかどうか不明			不詳
(5)ニムロトC	*		*	オソルコン2世の王子
(6)タケロトF	*	*	*	ニムロトCの子。恐らく後のタケロト2世。
(a)ホルサアセットB	*	*		不詳
(b)タケロトE				不詳
(7)オソルコンB	*	*		タケロト2世の王子。 後のオソルコン3世。
(8)タケロトG				オソルコン3世の王子。 後のタケロト3世。
(9)オソルコンF	*	*		タケロト3世か ルジュアメンの王子
アネクタケロト	年代不詳。息子アメンルジュがアル=ヒバに関係			不詳
シェションク	年代不詳			パマイの子

27 Cairo JE65841 と Berlin VA Ass.2258 でヘリシェフ司祭とされる。この両史料は、かつてはタケロトG（オソルコン3世の子）のものと考えられていたが、今ではタケロトFのものと考えられるようになった。Payraudeau, 2014, 63-66; Meffre, 2015, 305-309 を参照。

28 この点は、藤井2003を参照。

## (d) ヘラクレオポリスの地方統治者たち

リビア王朝時代におけるヘラクレオポリスの将軍とヘリシェフ（大）司祭を図表3に示した<sup>29</sup>。この図表3から、ヘラクレオポリス将軍の多くがヘラクレオポリスの主神ヘリシェフの（大）司祭を兼ねていたことが分かる。これはテーベのアメン大司祭の場合と同様であり、彼らヘラクレオポリス将軍が中部エジプトを治める軍政官であったことを示しているであろう。ただ第22王朝最初のヘラクレオポリス将軍であったと考えられるシェションク1世の王子ニムロトBは、ヘリシェフ（大）司祭とされていない。ヘラクレオポリスの将軍がヘリシェフ司祭を兼ねるのは、次のオソルコンH<sup>2</sup>からである<sup>30</sup>。したがってシェションク1世は、当初は将軍にヘラクレオポリスを治めさせようとしたということになる。しかしその後、テーベと同様にヘラクレオポリス将軍がヘリシェフ（大）司祭を兼ね、神殿機構を用いて中部エジプトを治めるようになった。こうしたことから、リビア王朝は「アメン神権国家」を体制内化して上エジプトを治める地方行政に変革してゆくなかで<sup>31</sup>、神殿機構を用いた支配の有効性を認識することになり、やがて神殿機構を用いた地方支配をヘラクレオポリスなどエジプト全土に広げていったと考えられる<sup>32</sup>。

出自についてみれば、リビア朝前半のヘラクレオポリス将軍は王子かアメン大司祭の子であったことが分かる。アメン大司祭の子がヘラクレオポリス将軍になったことが、テーベ・ヘラクレオポリス間の統合を進め、やがて上エジプトに並立王を出現させることになったと考えられる<sup>33</sup>。そしてリビア朝後半になると、ニムロトCの子孫によって世襲されていたことも分かる。この世襲の始まりも、やはりリビア朝後半における国土の分断と関係しているであろう。直系卑属によって世襲されたリビア朝後半のヘラクレオポリス将軍は、ヘラクレオポリスを治めるべく王によって任命された軍政官というより、ヘラクレオポリスに土着したヘラクレオポリス侯と言ってよい存在であったと考えられる<sup>34</sup>。実際、彼らは *h3ty-r*（侯）とされている。ヘラクレオポリスにおいても世襲が避けられていたのはリビア朝前半であり、リビア朝の分権的

29 図表3は、藤井2008の表1を基に、Payraudeau, 2014 および Meffre, 2015 の研究成果を加味し一部修正加筆して作成した。

30 年代不詳のアメンカアエムオペトやオソルコンH<sup>1</sup>が、ニムロトBとオソルコンH<sup>2</sup>の間に存在した可能性もある。

31 詳しくは、藤井1998を参照。

32 詳しくは、藤井2008を参照。

33 藤井2003を参照。

34 藤井2008、6-7頁。ただしタケロトGはヘラクレオポリスにかかわりを持たなかったと考えられるようになったことから、王が任命する軍政官からヘラクレオポリス侯へと性格を変じていったと現状では考えるべきであろう。従って藤井2008、7頁の議論は、一部修正する必要がある。

支配はこの世襲が避けられていた時期に機能していたと考えられるであろう。

図表3 ヘラクレオポリス将軍

①ニムロトB (シェションク1世の王子)

*imy-r mšꜥ n Nn-nswt* (ヘラクレオポリスの将軍)、*s3-nswt n Rꜥ-ms-sw* (ラメセスの王子)、*h3wty n mšꜥ (r) drw* (全軍の司令官)、*wr ʿ3?* (大首長?)

[史料] Cairo JE39410(ヘラクレオポリス出土)、Cairo JE37956(テル・モクダム出土)、Wien 5791(ヘリオポリス出土?)、BM 14594-5(サイス出土?)

②オソルコンH<sup>2</sup> (アメン大司祭ネスバネブジェドCの子)

*hm-ntr n Hry-š.f* (ヘリシェフ司祭)、*imy-r mšꜥ* (将軍)、*h3wty* (司令官)、*wr ʿ3 n (Pr)-šhm-hpr-Rꜥ* ((ペル・)セケムケペルラーの大首長)、*s3-nswt n Rꜥ-ms-sw* (ラメセスの王子)、*s3-nswt* (王子 \*王孫の意味で用いられている?)

[史料] Cairo JE94736(ヘラクレオポリス出土)、Beni Suef 博物館のブロック(ヘラクレオポリス出土)、ヘラクレオポリス第3中間期墓地2号墓出土のウシャブティ

③ニムロトC (オソルコン2世の王子)

*hm-ntr tpy n Hry-š.f* (ヘリシェフ大司祭)、*wr ʿ3 n (Pr)-šhm-hpr-Rꜥ* ((ペル・)セケムケペルラーの大首長)、*imy-r mšꜥ* (将軍)、*h3wty* (司令官)

※後にアメン大司祭となる。例えば Cairo CG42228-9

*hm-ntr tpy n Imn-Rꜥ* (アメン大司祭)、*imy-r mšꜥ n Nn-nswt* (ヘラクレオポリスの将軍)

[史料] Cairo JE45327(伝 Tell el Minieh 出土。オソルコン2世第16年の紀年のある奉獻碑)、Cairo CG42228-9

④タケロトF (ニムロトCの子、後のタケロト2世)

*hm-ntr tpy n Imn-Rꜥ* (アメン大司祭)、*hm-ntr [tpy?] n Hry-š.f* (ヘリシェフ[大?]司祭)、*hm-ntr Hry-š.f* (ヘリシェフ司祭)、*wr n Pr-šhm-hpr-Rꜥ* (ペル・セケムケペルラーの首長)、*s3-nswt n Rꜥ-ms-sw* (ラメセスの王子)、*s3-nswt* (王子 \*ラメセスの王子のことか?)、*imy-r šmꜥw* (上エジプト長官)、*imy-r mšꜥ* (将軍)、*h3wty* (司令官)

[史料] Temple J の碑文、Cairo JE65841(おそらくヘラクレオポリス出土)、アッシュール出土のアラバスター製アンフォラ(Berlin VA Ass.2258)、グロブ出土のステラ(Kestner Museum 1935.200.208)

⑤バクエンブタハ(タケロト2世の王子)

*imy-r mšꜥ n Nn-nswt* (ヘラクレオポリスの将軍)、*imy-r mšꜥ* (将軍)、*h3wty* (司令官)

[史料] カルナク神官年代記断片7(シェションク3世の第39年)、Cairo 11/9/21/17(奉獻碑)

⑥プタハウジュアネクエフ (ニムロトCの子)

⑨のヘムプタハBと同称号 (*mi-nn*) とされる。

[史料] パセンホル・ステラ

⑦ヘムプタハA (プタハウジュアネクエフの子)

⑨のヘムプタハBと同称号 (*mi-nn*) とされる。

[史料] パセンホル・ステラ

⑧パセンホルA (ヘムプタハAの子)

⑨のヘムプタハBと同称号 (*mi-nn*) とされる。

[史料] パセンホル・ステラ

⑨ヘムプタハB (パセンホルAの子)

*h3wty* (侯)、*imy-r šmꜥw* (上エジプト長官)、*imy-r ḥmw-ntr m Nn-nswt* (ヘラクレオポリスの司祭長官)、*imy-r mšꜥ* (将軍)

[史料] パセンホル・ステラ

\*ステラの主はヘムプタハBの子パセンホルBでネイト女神の司祭とされる。

～並立王パディバステト1世治下の有力者～

⑩イウルヘン

*[wr ʕn Pr ?]-šm-ḥpr-Rꜥ* ([ペル・]セケムケペルラー[の大首長?])、*ḥm-ntr n Imn-Rꜥ nb Pr-ḥnw* (ペル・ヘヌウの主アメン・ラーの司祭)、*ʕn Thr* (テヘルの長)、*h3wty* (司令官)

[史料] Cairo JE45530(パディバステト1世第6年の紀年のある奉献碑)

⑪パマイ

*ḥm-ntr tpy n Hry-šf* (ヘリシェフ大司祭)、*mk n Khtn* (ケヘテンのメク)

\*ステラは破損しており、他に称号があったかもしれない。

[史料] Copenhagen AE IN917(パディバステト1世の名のある奉献碑)

～年代不詳のヘラクレオポリス将軍～

\*第21王朝後半とされるが、将軍がヘリシェフ(大)司祭を兼ねていることから、筆者はリビア朝前半の可能性もあると考えている(藤井、2008、5-6頁)。

⑫アメンカアエムオペト

*h3wty* (司令官)、*imy-r mšꜥ* (将軍)、*ḥm-ntr tpy n Hry-šf* (ヘリシェフ大司祭)、*h3wty (n) p3 nḥt ʕn M* (マの大要塞の司令官)

[史料] ヘラクレオポリスの第3中間期墓地出土の碑文(Perez-Die and Vernus, 1992, No.15)

⑬オソルコンH<sup>1</sup>

*wr ʕn M* (マの大首長)、*h3wty* (司令官)、*imy-r mšꜥ* (将軍)、*ḥm-ntr tpy n Hry-šf* (ヘリシェフ大司祭)、*h3wty (n) p3 nḥt ʕn M* (マの大要塞の司令官)

[史料] ヘラクレオポリス第3中間期墓地出土の碑文(Perez-Die and Vernus, 1992, No.17)

## (e) メンフィスのプタハ大司祭

リビア王朝時代のプタハ大司祭についても、ここで簡単にその特徴を指摘しておこう<sup>35</sup>。リビア朝前半においては、先の第21王朝期より続くプタハ大司祭家の世襲が続いていた（図表1）。この家系のシェドスネフェルテムAはマ（シュウェシュ）の大首長の娘メフテンウエスケトと結婚していた。このマの大首長がニムロトAなのか、即位前のシェションク1世なのか明らかではないが、このプタハ大司祭家は第22王朝成立前よりシェションク1世の姻戚になっていたことになる。そのため第22王朝成立後も存続できたと考えられる。しかしいかなる理由によるのか全く不明だが、オソルコン2世治下になってプタハ大司祭にはその王子シェションクDが任命されることになった。そしてヘラクレオポリスと同様に、リビア朝後半になると、このシェションクDの子孫によってプタハ大司祭も世襲されることになる。ただテーベやヘラクレオポリスと異なって、プタハ大司祭は今のところ軍事称号を兼帯する者が知られていない。従って地方統治者ではあったであろうが、軍政官のような性格は帯びていなかったと考えられる。これはメンフィスがこの時代にあってもエジプトの中心都市であったことと関係しているであろう。リビア王朝時代のプタハ大司祭については、いずれ機会を改めて論じたいと考えている。

## (f) 下エジプトの地方統治者（リビア朝前半のシェションク3世治下まで）

図表4に下エジプト（一部オアシスを含む）で地方統治を担ったと考えられる将軍や（大）司祭を提示した<sup>36</sup>。史料が乏しいが、下エジプトでも確認される人物の多くが王族であり将軍<sup>37</sup>と司祭を兼ねている者が多い（図表4）。「ラメセスの王子」とされるものも多いが、筆者の理解では、「ラメセスの王子」は王と地方の橋渡しを期待され、支配権を分与された者であった<sup>38</sup>。リビア王朝は、下エジプトにおいても将軍を軍政官として地方に派遣して任地の（大）司祭を兼ねさせて地方統治の任務に就かせていたのであった。なおここでは取り上げないが、シェションク3世治下以降の下エジプトの地方統治者は、大首長あるいは大君（*wr ʕ*）とされるようになる。そして第22王朝はこれら地方統治者の中の第1人者というような立場になっていったと考えられる。

35 プタハ大司祭の研究に Maystre, 1992 がある。リビア王朝時代のメンフィスについては、Aston and Jeffreys, 2007, 61-82、およびその書評 Payraudeau, 2009 を参照。

36 図表4は、藤井2008の表2を基にして作成した。

37 *imy-r mnfy*（メンフィト部隊の長官）や *imy-r iswt*（イスウト部隊の長官）も *imy-r ms*（将軍）に準じた軍事称号である。

38 藤井信之2002を参照。

図表 4 下エジプトの地方統治者

[ヘリオポリス]

①ジェドプタハイウエフアंक(おそらくオソルコン 1 世の王子)

*wr m3w n [////]shtp ib n R<sup>c</sup>* (ラーの御心を安んじめる[ヘリオポリス]の大司祭)、*s3-nswt* (王子)、*imy-r mš<sup>c</sup>* (將軍)、*h3wty* (司令官)

[史料] New York MMA 10.176.42 (オソルコン 1 世第 6 年の紀年のある奉獻碑)

②バクエンネフィ(おそらくシェションク 3 世の王子)

*r-p<sup>t</sup> wr hr tpy t3wy* (両国のトップにある偉大なる公)、*r-p<sup>t</sup> wr tpy hm.f* (陛下の第 1 の偉大なる公)、*s3-nswt* (王子)、*s3 smsw n nb t3wy* (両国の主の長男)、*h3wty* (司令官) \*神職は確認されていない。

[史料] Cairo JE45610(ヘリオポリス付近出土。シェションク 3 世第 14 年の紀年のある奉獻碑)

[ブバスティス]

③ホル(全土の軍の司令官、ラメセスの王子イウプトの子)

*hm-ntr n B3stt 3(t) nb(t) (Pr)-B3stt* (ブバスティスの女主人偉大なるバステトの司祭)、*imy-r mš<sup>c</sup>* (將軍)、*h3wty* (司令官)、*imy-r iswt* (イスウト部隊の長官)

[史料] Cairo CG18435

④ジェドバステイウエフアंक

*imy-r mnfy n [?]* ([?]のメンフィト部隊の長官)、*hm-ntr n B3stt* (バステトの司祭)

[史料] Cairo CG39217

[ブシリシ]

⑤バクエンネフィ(陛下の第 1 の偉大なる公パディアセトの子)

*r-p<sup>t</sup> wr tpy hm(f)* (陛下の第 1 の偉大なる公)、*(hm)-ntr n nb hm<sup>nw</sup> Imn-R<sup>c</sup> nswt ntrw* (8 柱神の主で神々の王たるアメン・ラーの司祭)、*h3wty* (司令官)

[史料] London UC 14533(ブシリシ出土か? シェションク 3 世第 15 年の紀年のある奉獻碑)

\*スチュアートは、この人物の称号を *r-p<sup>t</sup> wr, hm-ntr tpy n nb hm<sup>nw</sup> Imn-R<sup>c</sup> nswt ntrw* (偉大なる公、8 柱神の主で神々の王たるアメン・ラーの大司祭)と読むが (Stewart, 1983, 4, pl.4)、この称号は上掲②の人物の称号と同じであって、*tpy* と *hm* は *r-p<sup>t</sup> wr* にかかると考える。

⑥タケロト C(おそらくシェションク 3 世の王子)

*s3-nswt n R<sup>c</sup>-ms-sw* (ラメセスの王子)、*h3wty n mš<sup>c</sup> (r) drw* (全軍の司令官)、*wr [//////////]* (////?/////の[大?]首長)、*s3 (n) nb t3wy* (両国の主の子 \*王子という意味) \*神職は確認されていない。

[史料] Louvre E.20905(ブシリシ出土か? シェションク 3 世第 18 年の紀年のある奉獻碑)

[イム]

⑦アセト(エム)アクビト

*s3-nswt (n) R<sup>c</sup>-ms-sw* (ラメセスの王子)

[史料] Louvre E.8099(Kom el-Hisn[古代のイム]出土か? オソルコン 1 世の名のある奉獻碑)



⑧パデベフウエンバステト

*hm-ntr tpy n Imn-R<sup>c</sup> nswt ntrw* (神々の王アメン・ラーの大司祭)、*s3-nswt n R<sup>c</sup>-ms-sw* (ラメセスの王子)、*mk n p3 wr* (首長のメク)、*h3wty* (司令官)

[史料] Berlin 7344(Kom el-Hisn[古代のイム]出土か? シェションク 3 世第 28 年の紀年のある奉獻碑)

[ペル・ソペド]

⑨ [オソル] コン(シェションクとカロマの所生、後のオソルコン 1 世か?)

*hm-ntr n Spdw nb i3bt* (東方の主ソペドの司祭)、*imy-r mš<sup>c</sup>* (将軍)、*h3wty [pd]t Pr-<sup>3</sup>* (ファラオの[弓兵]の司令官)

[史料] Saft el-Henna のブロック(第 21 王朝末?)

⑩エスエンワセト(下記のホルの父)

*imy-r mš<sup>c</sup>* (将軍)、*imy-r mnfyt* (メンフィト部隊の長官)、*hry pdt Pr-<sup>3</sup>* (ファラオの弓兵隊長)、*h3wty n pdt Pr-<sup>3</sup>* (ファラオの弓兵の司令官)、*hm-ntr n Spdw nb i3bt* (東方の主ソペドの司祭)、*h3ty-<sup>c</sup> n p3 rwdt n p3 r<sup>c</sup>* (東部地域の侯)

[史料] Cairo JE46600+München 6296, Cairo JE41664

⑪ホル(上記のエスエンワセトの子)

*imy-r mš<sup>c</sup>* (将軍)、*h3wty n pdt Pr-<sup>3</sup>* (ファラオの弓兵の司令官)、*hry pdt Pr-<sup>3</sup>* (ファラオの弓兵隊長)、*hm-ntr n Spdw nb i3bt* (東方の主ソペドの司祭)、*<sup>3</sup> (n) k<sup>c</sup>h(t)* (地区長官)、*h3ty-<sup>c</sup> n p3 rwdt n p3 r<sup>c</sup>* (東部地域の侯)

[史料・参考文献] Cairo JE46600+München 6296, Cairo JE41664

[所在地不明。おそらく下エジプト]

⑫ジェドホルイウエフアंक(シェションク 1 世の王子ないし孫)

*s3-nswt n R<sup>c</sup>-ms-sw* (ラメセスの王子)、*imy-r mš<sup>c</sup>* (将軍)、*h3wty* (司令官) \*神職は確認されていない。

[史料] Berlin 19717, London BM 26811.

[ダクラ・オアシス]

⑬ワイウハサト(マの首長の子)

*h3wty* (司令官)、*h3ty-<sup>c</sup> t3 wh3t* (オアシスの侯)、*h3ty-<sup>c</sup> n p3 t3 2 n wh3t* (オアシス 2 国の侯)、*<sup>3</sup> (n) k<sup>c</sup>h(t)* (地区長官)、*imy-r b<sup>c</sup>hw* (貯水池の長官)、*imy-r št3w* (灌木地の長官)、*hm-ntr (n) Hwt-Hr nbt Hwt-shm* (ディオスポリス・パルヴァの女主人ハトホルの司祭)、*hm-ntr n Hr Shmt nb Pr-d3d3* (ペル・ジャジャの主ホルスとセクメトの司祭)、*hm-ntr n St3 nb wh3t* (オアシスの主セトの司祭)

[史料] Ashmolean 1894.107a(シェションク王(1 世ないし 3 世)の第 5 年の紀年のあるステラ)

以上に見てきたように、リビア王朝は多くの場合、王族など血縁関係者<sup>39</sup>を（大）将軍として地方に派遣し、彼らに任地の（大）司祭を兼ねさせて神殿機構を利用して地方を治めさせていた。地方統治を担うものが（大）将軍であることから、地方統治を担う彼らは軍政官といえることができるであろう。これをまとめれば、リビア王朝の支配は「血縁関係に基づく分権的支配」であったと言えるだろう。

このように血縁関係が重んじられたことから、リビア王朝の支配体制下では婚姻政策も重要な役割を担っていた。次にこの点を見てみよう。

## 6. リビア王朝の支配体制：婚姻政策

リビア王朝は王族を軍政官として地方に派遣する一方で、地方の在地有力者を支配体制に取り込むため、王族女性を地方有力者に降嫁させた。新王国時代には王族女性が臣下に降嫁することがなかったことから、この婚姻政策はリビア王朝の支配の大きな特徴といえる。図表5は現在のところ史料から確認できるリビア朝王女の降嫁先を一覧にしたものである<sup>40</sup>。メンフィ

図表5 リビア朝王女の降嫁先

- ① シェションク1世(?)の王女テントセペフB ⇒ プタハ大司祭シェドスネフェルテム
- ② シェションク1世の王女タシェペンバステト ⇒ アメン第3司祭ジェドジェフティイウエフアंकA
- ③ オソルコン1世の王女サトホルケネム ⇒ テーベ（詳細不明）
- ④ ホルサアセットA王の王女アセットウルトA ⇒ アメン第4司祭ホルサアセットC
- ⑤ オソルコン2世(?)の王女チェスバステトベル ⇒ プタハ大司祭タケロトA
- ⑥ タケロト2世の王女シェペンソプデトB ⇒ アメン第4司祭ジェドコンスイウエフアंकC
- ⑦ タケロト2世の王女アセットウルトB ⇒ テーベ宰相ナクトエフムウトC
- ⑧ タケロト2世(?)の王女テントセペフD ⇒ ヘラクレオポリス侯プタハウジュアंकエフ
- ⑨ シェションク3世の王女アंकエスエンシェションク ⇒ イウエフアア（称号不詳）
- ⑩ タケロト3世の王女イルバステトウジャチャウ ⇒ テーベ宰相パカル
- ⑪ タケロト3世の王女ディアセットネステイ ⇒ テーベ宰相ネスパカシュティB
- ⑫ タケロト3世の王女アंकカロマ ⇒ アメン第3司祭パディアメンネブネストタウイ
- ⑬ タケロト3世の王女タネトサイ ⇒ コンス神殿の管理者 (*imy-r šn*)<sup>41</sup> ナクトエフムウトH
- ⑭ タケロト3世の王女 [//////////]アंक ⇒ アメンの合唱団の長官ホルウジャ

39 「ラメセスの王子」のような擬制的なものも含む。

40 図表5は、Kitchen, 1996, 479(Table 12), 594(Table \*12); Payraudeau, 2014, 388-392 を参考に作成した。

41 *imy-r šn* は、神殿の管理を任されていた人物と考えられる。Griffith, 1909, 65, n.3; Parker, 1962, 31-32; Vittmann, 1998, 290-292 を参照。

スのプタハ大司祭やヘラクレオポリス侯に降嫁している。またテーベでは、アメン大司祭の下にあった序列付きの司祭、アメン第3司祭とアメン第4司祭に降嫁している。またリビア朝後半になるとテーベ宰相に降嫁している。この変化は、リビア王朝のテーベ支配のあり方の変化を示しているであろう。リビア王朝は、前半ではアメン神官制度の枠組みを利用して支配していたが、後半になるとテーベ行政を担う宰相を中心とする支配にその支配体制を変容させたとみることができる。アメン第3司祭やアメン第4司祭あるいは宰相を務めていたのはテーベの有力家系の出身者であった。リビア王朝は、婚姻政策を用いて在地有力者を体制内化していたのであった。テーベは史料が多いことから、リビア王朝と在地有力者の関係をもう少し深く考察することができる。

図表6は、リビア朝王族たるアメン大司祭の娘たちまでを含めたリビア朝王族女性のテーベにおける降嫁先をまとめたものである<sup>42</sup>。王女ばかりでなく、アメン大司祭の娘も序列付きの司祭や王の秘書といったテーベの要職者に降嫁していることが分かる。このようにリビア王朝は婚姻政策を用いて地方の在地有力者を自らの支配体制に結び付けていたのであった。

リビア王朝時代のテーベの諸家系の史料では、第21王朝期以上に母系出自を示す系図が増えてくる。このことは、父系が重要であることに変わりはないが、リビア王朝時代には母系出自（婚姻関係）も重要になったことを示している。示される母系出自は、父系の家格より上位の家系である場合も多い。従ってリビア王朝の婚姻政策は、当時の世襲制で社会的流動性が低かったテーベの諸家系に社会的地位を上昇させる機会を与えていたと言える。つまりテーベの有力家系から見れば、リビア王朝との婚姻関係が自らのテーベ内での地位を高めることにつながっていたのであった。例えば、ジェドジェフティウエフアंक家出身のジェドコンスイウエフアंकAは、アメン大司祭イウプトの娘と結婚することでアメン第4司祭となっており、以後この家系はリビア朝王族との婚姻を重ねてアメン第4司祭を世襲することになった。またアメン第3司祭パディムートIIも父が第3司祭でないことから、アメン大司祭イウエロトの娘との婚姻が彼を第3司祭へと昇格させたと考えられる<sup>43</sup>。

このようにリビア王朝と婚姻関係を結ぶテーベの上位家系ばかりでなく、さらに下位の諸家系にもリビア王朝の婚姻政策は影響を与えていた。ネセルアメン家の例は下位の諸家系にとって、リビア朝王家と繋がる上位家系との婚姻がいかに重要であったかを示している（図表7）。ネセルアメン家は、もともと神殿の書記長を務める家系であった。リビア王朝と直接の婚姻関係は持たないが、神殿書記長ホルIIIは、リビア朝と直接の婚姻関係を持つネスパカシュティ家のアメン第3司祭ジェドジェフティウエフアंकAの娘と結婚していた。つまりホルIIIは、シェションク1世の孫娘と結婚していたことになる。このことが彼の神殿書記長職を安泰に

42 図表6は、Kitchen, 1996, 479(Table 12), 594(Table \*12); Payraudeau, 2014, 388-392を参考に作成した。

43 詳しくは、藤井1998を参照。

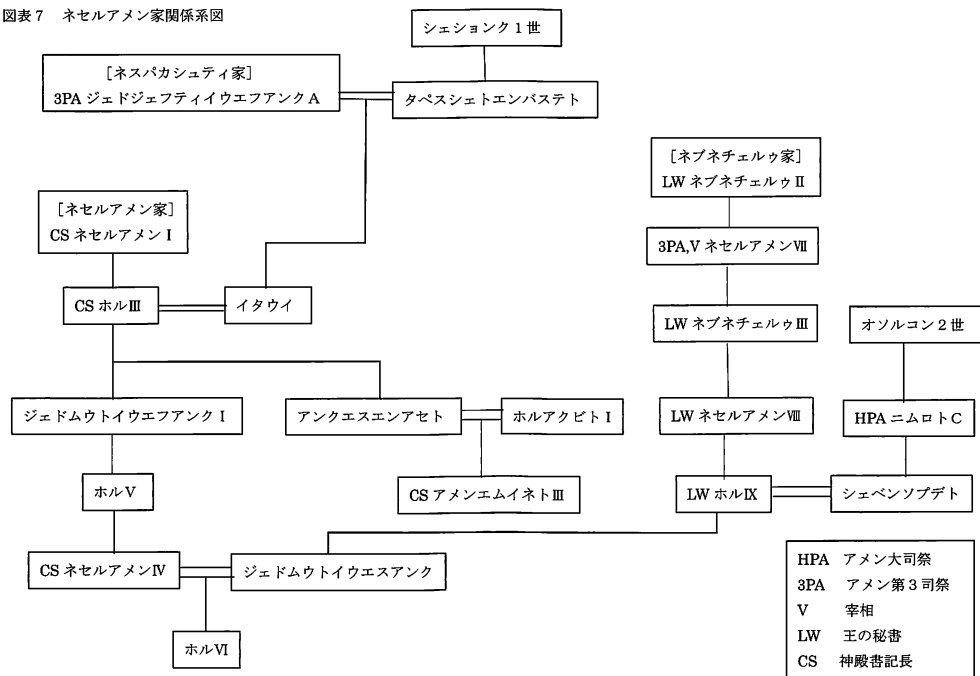
させていたであろう。しかしその後ネセルアメン家はリビア王朝の姻戚になれず、その間、家職となっていた神殿書記長職を失うことになった。ところがホルⅢの曾孫ネセルアメンⅣがネブネチェルウ家のホルⅨの娘と結婚すると、ネセルアメン家は神殿書記長職に返り咲くことができたのである。ネブネチェルウ家は代々王の秘書を務める名門で、ホルⅨはアメン大司祭ニムロトCの娘と結婚しリビア王朝の姻戚になっていた。ネセルアメン家が再び神殿書記長職を得ることができたのは、リビア王朝の姻戚となっている上位家系のネブネチェルウ家と婚姻関係を持つことができたからであった。このようにテーベの諸家系においては、リビア王朝との血の距離が重要であった。リビア王朝の婚姻政策がリビア王朝に対する求心力を高めていたといえるであろう<sup>44</sup>。

図表6 リビア朝王族女性（王女かアメン大司祭の娘）のテーベにおける降嫁先

- ① シュションク 1 世の王女タペスシェトエンバステト  
⇒アメン第 3 司祭ジェドジェフティイウエフアंक A
- ② オソルコン（1 世）の王女サトホルケネム  
⇒詳細不明（ラメッセウム出土のステラ）
- ③ アメン大司祭イウプトの娘ネシコンスパヘレド  
⇒アメン第 4 司祭ジェドコンスイウエフアंक A
- ④ アメン大司祭イウエロトの娘ジェドアセトイウエスアंक  
⇒アメン第 3 司祭パディムート II
- ⑤ ホルサアセト A の王女アセトウルト  
⇒アメン第 4 司祭ホルサアセト C
- ⑥ アメン大司祭ニムロト C の娘シェベンソブデト  
⇒王の秘書ホル IX
- ⑦ タケロト 2 世の王女シェベンソブデト  
⇒アメン第 4 司祭ジェドコンスイウエフアंक C
- ⑧ タケロト 2 世の王女アセトウルト  
⇒テーベ宰相ナクトエフムウト C
- ⑨ タケロト 3 世の王女イルバステトウジャチャウ  
⇒テーベ宰相パカル
- ⑩ タケロト 3 世の王女ディアセトネステイ  
⇒テーベ宰相ネスパカシュティ B
- ⑪ タケロト 3 世の王女アंकカロマ  
⇒アメン第 3 司祭パディアメンネブネスタウイ
- ⑫ タケロト 3 世の王女タネトサイ  
⇒コンス神殿の管理者ナクトエフムウト H
- ⑬ タケロト 3 世の王女[//////////]アंक  
⇒アメンの合唱団の長官ホルウジャ
- ⑭ アメン大司祭オソルコン F の娘ムウトイルディス  
⇒(神殿の)管理者ウエンネフェル

44 詳しくは、藤井 1998 を参照。

図表7 ネセルアメン家関係系図



## 6 おわりに

以上に見てきたように、リビア王朝は血縁関係者による分治を統治の基本としていたのである。派遣された王族は、軍事指揮権を付託された軍政官であり、任地では神殿の（大）司祭でもあった。彼らは付託された軍事力と任地の神殿機構を用いて地方を治めていた。またリビア王朝は一族を地方統治者とするとともに、婚姻政策によって在地勢力を体制内化していた。まとめれば、血縁関係者による分治と婚姻政策がリビア王朝の支配体制における大きな特徴といえることができる。そして軍事力を託された地方統治者が神殿機構を用いて地方を治めた、というのがもう一つの特徴であった。

前1千年紀の後半になると、エジプトはアケメネス朝ペルシアやプトレマイオス朝などの異民族支配に服するようになる。その折、支配者たちが直面したのは、エジプトの在地社会に広がる神殿の勢力であった<sup>45</sup>。支配王朝と各地の神殿との関係が、政治的に重要な要素となって立ち現れることになる。このような政治的な構図の起源が、実のところ遡ればリビア王朝時代に求められるということが、ここでの検討から明らかになったのではないだろうか。確かに神官団は新王国時代に成長しエジプト社会の一勢力として重要な位置を占めるようになった。しかしリビア王朝時代になって、神殿機構が地方統治と結び付けられるようになったことから、支配王朝と各地の神殿の関係が政治的にさらに重要となっていったのであった。リビア王朝の支配は、プトレマイオス朝にいたる後世のエジプトに大きな影響を残したといえるであろう。

45 アケメネス朝ペルシアと対峙していた最後の独立期（第28王朝—第30王朝）に、エジプトの指導的立場にあった有力者も（大）将軍と司祭を兼ねていた。この点、Fujii, 2015を参照。

リビア王朝時代は、エジプト史の大きな転換期だったのである。

<謝辞> 本稿執筆において、地図・図版の作成に関西大学国際文化財・文化研究センターのリサーチ・アシスタント、肥後時尚氏のご協力を頂いた。この場を借りて深謝申し上げる。

<参考文献>

- Aston, D. A. (1989) : "Takeloth II – A King of the 'Theban Twenty-third Dynasty'?", *JEA* 75, pp. 139-153.
- Aston, D. A. (2009a) : "Takeloth II, A King of the Herakleopolitan/Theban Twenty-third Dynasty Revisited: the Chronology of Dynasties 22 and 23", in G. P. F. Broekman, R. J. Demarée and O. E. Kaper (eds.), *The Libyan Period in Egypt*. Leuven, 1-28.
- Aston, D. A. (2009b) : *Burial Assemblages of Dynasty 21-25. Chronology – Typology Developments*, Wien.
- Aston, D. A. and Jeffreys, D. G. (2007) : *The Survey of Memphis III: The Third Intermediate Period Levels*, London.
- Barwic, M. (2011) : *The Twilight of Ramesside Egypt*, Warszawa.
- Beckerath, J. von (2003) : "Über das Verhältnis der 23. zur 22. Dynastie", in N. Kloth, K. Martin, and E. Pardey (eds.), *Es werde niedergelegt als Schriftstück. Festschrift für Hartwig Altenmüller zum 65. Geburtstag*, BSAK 9, 31-36.
- Bierbrier, M. L. (1975) : *The Late New Kingdom in Egypt(c.1300-664 B.C.)*, Warminster.
- Brandl, H. (2008) : *Untersuchungen zur steinernen Privatplastik der Dritten Zwischenzeit. Typologie • Ikonographie • Stilistik*, Berlin.
- Broekman, G.P.F., Demarée, R.J. and Kaper, O.E. (eds.) (2009) : *The Libyan Period in Egypt*. Leuven.
- Camino, R. A. (1958) : *The Chronicle of Prince Osorkon*, Roma.
- Chevereau, P.-M. (1985) : *Prosopographie des cadres militaires égyptiens de la Basse Époque*, Antony.
- Fujii, N. (2015) : "A Prosopographical Study of the Inscription on the Sarcophagus of Pediese(Berlin 29)", *The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture*, Vol.2, 49-65.
- Gomaà, F. (1974) : *Die libyschen Fürstentümer des Deltas*, Wiesbaden.
- Grandet, P. (2005) : *Le papyrus Harris I (BM 9999)*, Vol.2, 2e éd., Le Caire.
- Griffith, F. Ll. (1909) : *Catalogue of the Demotic Papyri in the John Rylands Library Manchester*, III, London.

- Hornung, E., Krauss, R. and Warburton, D.A. (eds.) (2006) : *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden.
- Jansen-Winkel, K. (2006) : "The Chronology of the Third Intermediate Period: Dyns. 22-24", in E. Hornung, R. Krauss and D.A. Warburton (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*. Leiden, 234-264.
- Jansen-Winkel, K. (2007) : *Inschriften der Spätzeit. Teil II: Die 22. – 24. Dynastie*, Wiesbaden.
- Jansen-Winkel, K. (2009) : *Inschriften der Spätzeit. Teil III: Die 25. Dynastie*, Wiesbaden.
- Kitchen, K. A. (1990) : "The Arrival of the Libyans in Late New Kingdom Egypt" in A. Leahy, (ed.) *Libya and Egypt c1300-750 BC*, London, 15-27.
- Kitchen, K. A. (1996) : *The Third Intermediate Period in Egypt* (1st ed.1972, 2nd ed. with supplement 1986, Reprinted with a new preface 1996), Warminster.
- Leahy, A. (1985) : "The Libyan Period in Egypt, An Essay in Interpretation" *Libyan Studies* 16, 51-65.
- Leahy, A. (1990) : "Abydos in the Libyan Period", in A. Leahy, (ed.) *Libya and Egypt c1300-750 BC*, London, 155-200.
- Leahy, A. (ed.) (1990) : *Libya and Egypt c1300-750 BC*, London.
- Malinine, M. , Posener, G. et Vercoutter, J. (1968) : *Catalogue des stèles du Sérapéum de Memphis*, Tome I , Paris.
- Maystre, Ch. (1992) : *Les grands prêtres de Ptah de Memphis*, Göttingen.
- Meffre, R. (2015) : *D'Héracléopolis à Hermopolis*, Paris.
- Moje, J. (2014) : *Herrschaftsräume und Herrschaftswissen ägyptischer Lokalregenten: Soziokulturelle Interaktionen zur Machtkonsolidierung vom 8. Bis zum 4. Jahrhundert v. Chr.*, Berlin.
- Montet, P. (1966) : *Le Lac sacré de Tanis*, Paris.
- Parker, R. A. (1962) : *A Saite Oracle Papyrus from Thebes*, Providence.
- Payraudeau, F. (2009) : "Review of Aston, D. A. and Jeffreys, D. G. *The Survey of Memphis III: The Third Intermediate Period Levels*, London 2007", *CdÉ* 84, 188-191.
- Payraudeau, F. (2014) : *Administration, société et pouvoir à Thèbes sous la XXIIe dynastie bubastite*, Le Caire.
- Perez-Die, M. and Vernus, P. (1992) : *Excavaciones en Ehnasya el Medina*, I, Madrid.
- Redford, S. (2002) : *The Harem Conspiracy: The Murder of Ramesses III*, Northern Illinois U.P.
- Stewart, H. M. (1983) : *Egyptian Stelae, Reliefs and Paintings from the Petrie Collection*, III, Warminster.
- Troy, L. S. (2009) : "The Geographic Origins of the "Bubastite" Dynasty and Possible Locations

- for the Royal Residence and Burial Place of Shoshenq I", in G.P.F. Broekman, R.J. Demarée and O.E. Kaper (eds.), *The Libyan Period in Egypt*, Leuven, 341-359.
- Vernus, P. (2003) : *Affairs and Scandals in Ancient Egypt*, Ithaca and London.
- Vittmann, G. (1978) : *Priester und Beamte im Theben der Spätzeit*, Wien.
- Vittmann, G. (1998) : *Der demotische Papyrus Rylands 9*, Wiesbaden.
- Yoyotte, J. (1961) : "Les principautés du delta au temps de l'anarchie libyenne" *Mélanges Maspero*, I-4, 121-181.
- Yoyotte, J. (1977) : "Osorkon fils de Mehytouskhé', un pharaon oublié ?," *BSFE* 77/78, 39-54.
- Yoyotte, J. (2012) : *Les principautés du Delta au temps de l'anarchie libyenne*, réédition revue et augmentée, Le Caire.
- 藤井信之 (1995a) : 「エジプト第 23 王朝の所在地問題について」『関学西洋史論集』20、13-28.
- 藤井信之 (1995b) : 「オソルコン 3 世後の上エジプト」『オリエント』38-1、113-129.
- 藤井信之 (1998) : 「リビア王朝の支配とアメン神官団」『西洋史学』192、23-47.
- 藤井信之 (2003) : 「「テーベの第 23 王朝」成立の背景」屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』同成社、285-297.
- 藤井信之 (2008) : 「リビア王朝の地方支配と神殿」『古代史年報』6、1-20.
- 藤井信之 (2002) : 「「ラメセスの王子」について」『関学西洋史論集』25、19-34.
- 藤井信之 (2012) : 「ソロモンへ嫁した「ファラオの娘」をめぐる問題について」『神戸国際大学紀要』83、25-34.
- 藤井信之 (2016) : 「リビア系諸王朝と諸王をめぐる問題について」『古代エジプト研究』1、23-47.



地図

